巻頭言

# 「帰国子女教育を考える会」の今後に期待する

足　立　　尭
海外子女教育振興財団関西分室長

公立高校での 35 年間の教職経験は、およそ海外子女教育とは無縁のもであったが 94 年４月からこの異質な世界に係わって６年目を迎えている。この間、教育相談員としての日常は出国時の海外での子どもの教育・帰国時の受け入れ教育や受験対策などについて情報を提供するとともに、個々の具体的な問題や悩みに関する相談に応じアドバイスすることが主である。面談を通して実感することは、赴任先・子どもの年齢・家族構成・駐在期間・親の教育観など二つとして同じケースが無いこと、それぞれに固有の課題があることなどである。そこに潜むさまざまな教育課題を直に感じ、個々が抱える課題の解決には、できるだけ詳細で正確な情報の必要性と的確な助言の重要性を感じつつ日々情報の収集と研讃に努めている。この間、「帰国子女教育を考える会」に参加する機会を得て、各例会の充実した内容から多くを学ぶことができ、大変感謝している。本会の発足当初については理解していないが、94 年から参加しての感想と少々の私見を思いつくままに述べてみたい。

会の運営上止むを得ないこと仁理解しながらも、各例会の講演やレポートの後、会員相互の協議する時間が少ないことにいつも消化不良を感じている。この会がさまざまな立場で帰国子女問題を考える者の集まりであるという特色を生かすには、できるだけ多角的に論議をする場を保証することが、強く望まれる。

次に、例会での報告や協議の内容には、国の教育施策や現場の教育活動に係わる重要な意見や提言が散見され、これを言いっ放しにしないで学校現場や関係機関に発信していく方法はないものかと感じている。第３の教育改革が叫ばれている今日、学校５日制とともに新しい教育課程の実施を目前にして「総合的な学習」をはじめ多様な教育活動に国際理解教育をどう取り入れるか、という論議が盛んな今、帰国子女の異文化体験、そこで体得した彼等の特性を国際理解教育の中で生かす方策を研究検討し提言することは、本会の設立趣旨から大きく外れるものではないと思われる。そのために、帰国子女受け入れ校の教員のみならず海外派遣教員などの積極的な参加を、さらには教育委員会の関係者の参加をも促すことが会の活動及び成果を広く発信できることになるのではないかと考える。

さらに、教育の問題は言うまでもなく教育する側の考え方だけではなく、教育を受ける側の意見も重要である。本会にも以前帰国子女の参加がみられたが、最近は皆無のようである。同じ会員としての参加には無理があると思われるので、帰国子女を主とした発言・協議をする場を提供する企画はできないものか。帰国子女の実態や問題点を教師の一方向からの観察・分析だけではなく、真に彼等が何を感じ何を求めているのかを確実に引き出し、それを理解することが重要であり、それなくして帰国子女教育を論ずることはできないと考える。

「帰国子女教育を考える会」の一層の充実と発展に期待している。